View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

J. Agric. Sci., Tokyo Univ. Agric., 53 (3), 253–258 (2008)
東京農大農学集報，53（3），253–258（2008）

動物を飼育するということ

―家庭動物飼育に関する意識調査―

土田あさみ*・増田宏司*

（平成 20 年 5 月 22 日受付/平成 20 年 9 月 2 日受理）

要約：大学生を対象に安楽死および動物虐待に関する意識調査を，四国および近畿の 3 つの中学に通う中学生を対象に家庭での動物飼育に関する意識調査をそれぞれ実施した。大学生への調査の結果，動物に身体的苦痛を伴う人の行為を主として動物虐待と認識している学生が多く見られ，およそ 4 分の 3 の学生は安楽死を場合によっては認めると回答した。一方，中学生に実施した動物飼育に関する調査結果では，動物への関心は動物飼育の有無で有意差がみられ，さらに，飼育動物種によっても影響されることが示された。飼育動物の中でもイヌおよびネコは飼育者にコミュニケーションへの意識を高めることも示唆された。

キーワード：安楽死，コミュニケーション，飼育動物，動物虐待，動物飼育

緒　　言

家庭動物は，以前は触れ合う対象として「ペット」と呼ばれていたが，今日では「伴侶」動物（コンパニオン・アニマル）と呼ばれる。これら動物は単なる「家庭動物」ではなく，人々の生活の友あるいは伴侶としての地位を得つつある。平成 14 年に「身体障害者補助犬法」が施行され，次いで平成 17 年に「動物の愛護および管理に関する法律」が改正されたことは，人間社会での動物たちの活躍が認められ，かつ期待されている証である。しかし，動物飼育とは毎日餌を与え掃除し健康管理をし，さらに動物への苦痛が最小になるように配慮することであり，継続的な労力と経済力を必要とする。この点について，飼育者の飼育動物に対する福祉観，たとえば「適切な飼育環境」あるいは「動物虐待」に関する認識は一般的にどのようであろうか。特に，「動物の愛護及び管理に関する法律」からみえる日本人の動物に対する姿勢は，家庭動物に重点をおいたもので，畜産動物や実験動物に重心を置いた欧米の法律とは異なり[1]，観念的であるとも評される[2]。

それではどのような飼育方法が動物福祉に適合し虐待ではないと定義できるのであろうか。日本における動物販売の形態や動物種の流行の波をみると，知らないうちに動物福祉に反する飼育をしている状況が多少なりともあるのではないかと推測できる。また，日本では法律上イヌやネコの引取りを自治体に義務付けていることもあり，終生飼育を考えると動物福祉に対する意識は欧米とは異なるものと予想される。

今回，我々は動物福祉の認識の現状を把握し，また動物の飼育に対する飼育者意識の影響について調査した。これらの調査結果を基に，本報告では動物虐待と安楽死受容条件について，および家庭での動物飼育の現状とその効果について解析を試みた。

本研究では特に以下の 3 点を明らかにすることを目的とした。

1. 大学生，とくに動物に興味を有する学生における動物福祉に対する現状認識を把握する。
2. 家庭動物の飼育の効果を明らかにする。
3. 家庭における動物飼育の現状を知る。

材 料 と 方 法

1. 対象者および調査時期

1） 大学生

東京農業大学農学部 1 年生で「伴侶動物学」を選択した学生を対象とし，平成 18（2006）年 10 月および平成 19（2007）年 10 月にそれぞれ調査を実施した。

2） 中学生

愛媛県の海に近い小都市（人口密度 88 人/km^2，平成 19 年 4 月現在）にある A 中学 1 年～3 年，奈良県の中都市（3,181 人/km^2，平成 17 年 3 月現在）にある B 中学 2 年生，および京都府の内陸の小都市（58 人/km^2，平成 15 年 10 月現在）にある C 中学 2 年生を対象に意識調査を実施した。調査時期は平成 18 年 12 月～平成 19 年 1 月である。

2. アンケートのデザイン

1） 大学生

いずれも複数選択方式で実施した。調査書を授業終了後に配布して持ち帰らせ，1 週間後に回収した。

動物虐待については，一般飼育管理に関すること（管理放棄，遺棄，不衛生管理等）および飼育に付随する処置（マイクロチップ装着，不妊手術）をはじめ，動物園などでの動物の展示や動物実験での処置，闘犬・闘牛・闘鶏，動物の通信販売および屠殺等を質問項目とした。

* 東京農業大学農学部バイオセラピー学科伴侶動物学研究室

表 1　対象者の内訳

1-1　大学生

年度	有効回答数	性別 男子（人）	女子（人）	動物飼育の有無 飼育(人)		非飼育率(人)	
2006	99	21	78	61	(62%)	38	(38%)
2007	125	36	89	78	(62%)	47	(38%)
合計	224	57	167	139	(62%)	85	(38%)

1-2　中学生

中学校	男子(人) 飼育		男子(人) 非飼育		女子(人) 飼育		女子(人) 非飼育		小計(人)
A	27	(34%)	11	(14%)	24	(30%)	17	(22%)	79
B	22	(19%)	30	(26%)	26	(23%)	37	(32%)	115
C	44	(31%)	35	(24%)	38	(27%)	26	(18%)	143
合計	93	(28%)	76	(23%)	88	(26%)	80	(24%)	337

安楽死では，飼育者不在の場合や不治の病，実験動物の処遇，人に怪我をさせた場合，および安楽死を認めない等について質問した。

2）　中学生

質問紙は選択方式および記述式の両方式とした。A 中学と B 中学では，調査票を生徒に配布し，自宅に持ち帰らせて記入した後学校で回収した。C 中学では記入と回収の両方を学校で同日に実施した。

家庭で子どもたちが動物とどのようにかかわっているのかを把握すべく，ペットの飼育状況（気をつけていることと困っていること：自由記述方式），動物への関心度（飼育やしつけの催しへの参加の意志：選択方式，動物に関して知りたいこと：自由記述方式）について質問した。

3.　統計処理

有意差検定は，JAVA Script-STAT v.4.41j（http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/freq/chisq2.htm）および Fisher's exact test（Extended）（http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/exact/fisher/getpar.html）を用いて χ^2 検定法により行った。

結　　果

1.　対象者

1）　大学生

調査書の配布数は 2006 年は 162，回収数 106（回収率 65.43%），有効回答数 98，2007 年の配布数は 212，回収数 153（回収率 72.2%），有効回答数 125 で，内訳は表 1-1 のとおりであった。

2）　中学生

A 中学は 1 年～3 年の生徒 100 名（回答者 79 名，回収率 70%），B 中学は 2 年の生徒 174 名（回答者 115 名，回収率 66%），および C 中学は 2 年の生徒 149 名（回答者 143 名，回収率 96%）を対象者とした（表 1-2）。得られた結果を飼育動物別（イヌおよび/あるいはネコの飼育者（イヌネコ飼育者），イヌやネコ以外の動物飼育者（その他飼育者），および動物飼育をしていない非飼育者）に分類して検討した。なお，動物飼育については，現在の飼育の有無によってまとめ，過去の飼育歴は問わなかった。

2.　飼育率

1）　大学生

2006 年および 2007 年ともに，動物飼育率は 62% で，その内訳をみると，両年ともイヌの飼育率がもっとも高く（30～36%），次いで魚類（2006 年）やネコ（2007 年）であった（図 1-1）。

2）　中学生

動物飼育率は，A 中学で 64%，B 中学で 42%，そして C 中学で 58% であった（表 1-2）。全体で，イヌネコ飼育率は 37%，その他飼育率は 17%，非飼育率は 46% であった。飼育動物種内訳をみると，3 つの中学ともイヌの飼育率がもっとも高かった（45～71%）が，A 中学では魚類の飼育率が 43%でイヌのそれと変わらなかった（図 1-2）。

3.　動物虐待に関する認識と安楽死の受認条件の把握

1）　動物虐待と思うもの

14 項目における回答率を図 2 に示した。両年度ともほぼ同様の結果であった。回答率の最も高い項目は「暴力」で，次いで「管理放棄」「不衛生管理」「動物遺棄」「無麻酔下での実験」が高い回答率を示した。「闘犬・闘牛・闘鶏」は 27～34%，「通販」は 30～39% であった。また，「屠殺」や「マイクロチップ装着」の回答率はそれぞれ 13～16%，9～13% であった。このうち動物遺棄と不妊手術では統計学的有意差を示し（それぞれ $\chi^2(3)=20.905$, $p<0.01$, $\chi^2(3)=11.4738$, $p<0.05$），2007 年度学生の非飼育者では「動物遺棄」が低く，「不妊手術」は高かった。

2）　安楽死を認めるのはどの場合か

最も高い回答率を示したのは「不治の病」であり，最も低いものは「人に危害を加えた場合」であった。「安楽死は

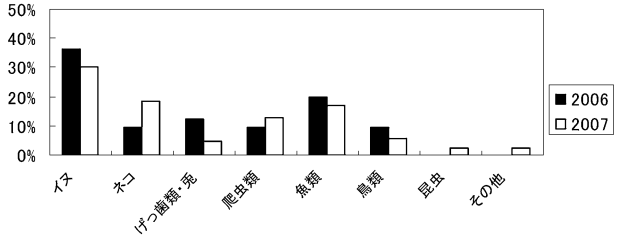

図 1-1　飼育動物種内訳：大学生

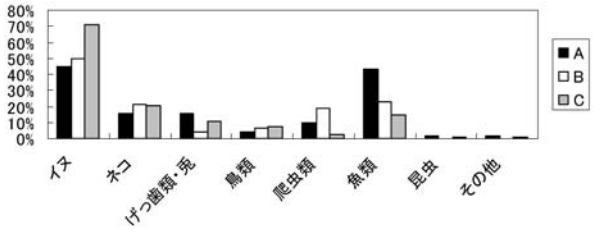

図 1-2　飼育動物種内訳：中学生

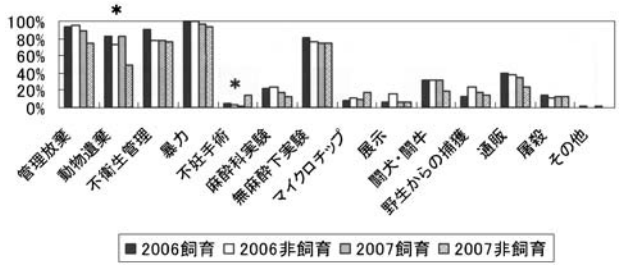

図 2　動物虐待と思うもの（複数回答）

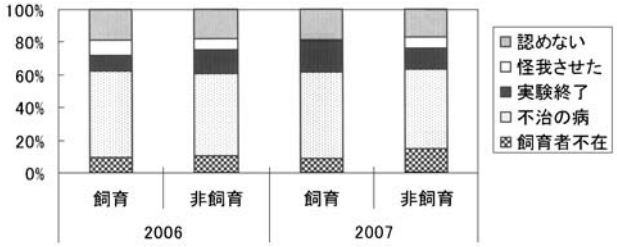

図 3　安楽死を認めるのはどの場合か（複数回答）

認めない」は 23～24％で，条件付で安楽死を認める回答がおよそ 3/4 を占めた。これらの回答傾向における動物飼育の有無や調査年度での違いは明らかでなかった（図 3）。

4.　動物飼育の効果

1）「飼育やしつけの催しに参加するか」

本質問は「はい/いいえ」の二者択一形式での回答であった。結果，「はい」の回答率は飼育者で有意に高く，特にその他飼育者（イヌやネコ以外の動物を飼育している者）で高い回答率を示した（図 4，$\chi^2(2)=15.936$，$p<0.01$）。データには示していないが，これには，男子での結果が反映されており，女子の場合はイヌネコ飼育者（イヌおよび/あるいはネコを飼育している者で，その他動物を飼育している場合も含む）の方がその他飼育者よりも高い回答率であった。

2）「動物について知りたいことは何か」

本項目は自由記述による回答であった。回答率は飼育者で 54％，非飼育者で 37％で両者の間に有意差があった（$\chi^2(1)=9.819$，$p<0.01$）。記述内容を，実学的内容として「飼育方法」「コミュニケーション・しつけ関係」に，座学的内容として「サイエンス領域」「福祉・教育」「その他」に分類したところ，イヌネコ飼育者では「コミュニケーション・しつけ関係」に関心が高く，その他飼育者や非飼育者では「座学その他」に関心が高く，両者に有意差がみられた（図 5，$\chi^2(4)=19.945$，$p<0.01$）。

5.　動物飼育の現状

1）「飼育で最も気をつけていること一つ」

本項目は自由記述による回答であったが，イヌネコ飼育者で 82％，その他飼育者で 91％の回答率であった。回答内容を，「飼育管理」（給餌給水，掃除，散歩（イヌ），健康管理），「コミュニケーション」（声かけ，遊ぶなど），「しつけ」（しつけ，吠えないように，甘やかさないなど），「その他」（人の安全，衛生，その他）に分類して検討した。ほとんどの飼育者が「飼育管理」を挙げたが，イヌネコ飼育者よりその他飼育者にその傾向が強く見られ（$\chi^2(1)=6.717$，$p<0.01$），また，イヌネコ飼育者では「コミュニケーション」も挙げた（$\chi^2(1)=8.315$，$p<0.01$）（図 6）。

2）「飼育で最も困っていること一つ」

本項目も自由記述による回答で，イヌネコ飼育者で 67％，その他飼育者で 68％の回答率であった。回答内容を，「飼育管理」（給餌給水，掃除，動物の手入れ，散歩，脱毛，留守時の管理，健康など），「行動上の苦情」（排尿の癖，吠えること，咬むこと，爪とぎなど），「コミュニケーション」（気持ちがわからない，嫌われている，なつかない）および「費用」（エサ代，お金がかかる）に分類した。飼育で最も困っていることは「飼育管理」であった（イヌネコ飼育者とその他飼育者に有意差なし）が，イヌネコ飼育者では「行動上の苦情」も多く挙げ，その他飼育者との間に有意差があった（$\chi^2(1)=8.090$，$p<0.01$）（図 7）。

考　　察

「福祉」は個体が生物学的に適応して次世代へと継がれていくことを重視する言葉であると解釈されている[2)]。そして，「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」（環境省告示）には，飼養動物の終生飼育，適正な飼料および給水，健康の保持，環境衛生にも努力する旨（第 3 章第 1 項，第 4 章第 2 項および第 3 項）が盛り込まれており，不適切な飼育は動物福祉に反すると解釈できる。今回の動物に興味を有する学生を対象とした調査結果では，学生の一部は管理放棄，動物遺棄および不衛生管理が動物虐待と考えておらず，このことは管理に問題があってもそれが直接，福祉に反するものではないと認識していることを示唆するものであろう。また，同基準によれば，家庭動物の飼育の際に

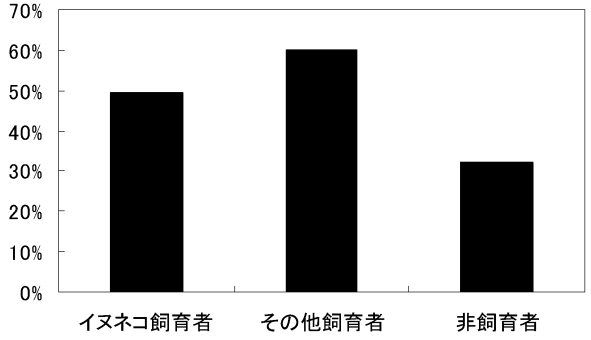

図 4 飼育やしつけの催しに参加する回答率

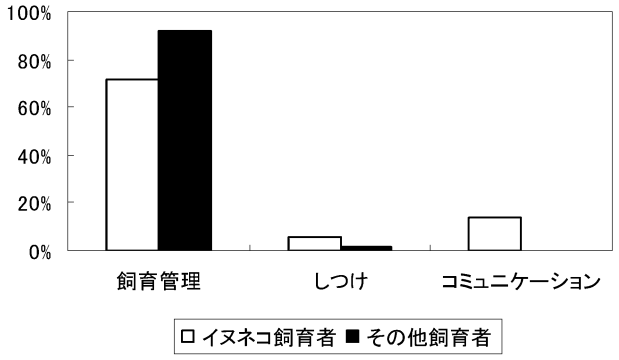

図 6 「飼育で最も気をつけていること」

は「所有の明示」(第 4 章第 1 項) でマイクロチップの装着を推奨しており，さらに繁殖についても飼養許容範囲を考慮の上場合によっては不妊手術を勧めている (第 4 章第 5 項)。今回わずかながらもマイクロチップ装着や不妊手術を動物虐待であるとした者がおり，動物飼養基準が一般に普及されていないことが明らかとなった。

平成 15 年度に内閣府の実施した動物愛護に関する世論調査結果でも，イヌの飼育者における所有の明示方法としてのマイクロチップの装着率はイヌで 2.4% であり，マイクロチップの普及がまだ進んでいない様子が伺えた。さらに，動物遺棄についての認識の甘さを示す結果もみられ，終生飼育に対する飼育者の責任と義務を浸透させる必要があると考えられた。

また，一般に意識しないで不適切な動物飼育をしている場合が多いと推察される。人はかかわったことのある動物に対して愛着を持つ傾向にある。ノラネコが怪我をした場合でも，エサやりの経験のある人はそうでない人に比べて有意に，なんらかの治療を試みると回答している[5]。動物を飼育することで生じる責任と義務を飼育者に自覚してもらい，飼育動物の習性を基盤にした適正な飼育を推奨するための教育や啓発活動が一層必要と考えられた。

動物の安楽死に関する調査で安楽死を認めない学生は 23～24% で，前述の世論調査結果 (24.3%) とほぼ同じ割合であった。一方，13～14% の学生が飼育者不在であれば安楽死を認めるとしており，自治体によるイヌやネコの引取りを肯定するものと考えられる。これはまた，現在自治体やボランティアが行っているイヌやネコの譲渡活動の必

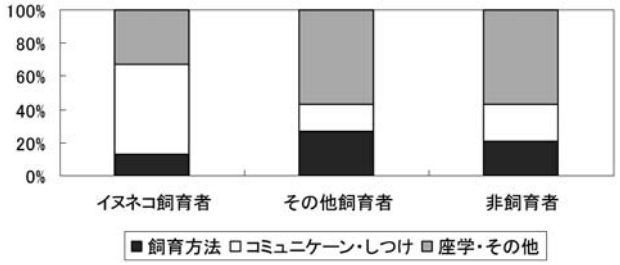

図 5 「動物について知りたいことは何か」

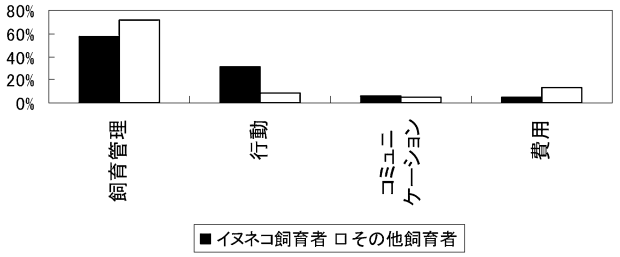

図 7 「飼育で最も困っていること」

要性を証明するものととらえることができる。

家庭動物に関する調査では，動物飼育は動物への関心に影響し，飼育動物によって関心事に違いが見られた。特に，イヌやネコを飼育している場合，動物との意志の疎通に興味を示していた。これは，イヌやネコの飼育が人にコミュニケーションを意識させることを示すもので，イヌやネコの持つ能力と考えられる。既にイヌによる介在活動では痴呆症の人や自閉症児で効果が見られ[3,4]，人間の言葉を介しない対話あるいはかかわりが可能であると報告されている。一方，イヌやネコの飼育では問題とみられる行動に苦慮している様子があり，その対処が必要であることも示唆された。

反省点としては，アンケートでイヌやネコの飼育場所および飼育動物の主たる管理者について問わなかったことが挙げられる。イヌやネコは家族全体で飼育している状況が一般的であるのに対し，その他の動物種では家族内で飼育者が決まっているのではないかと推察される。従って，飼育動物に対する責任感の有無は動物への関心や態度に影響すると予測される。

結　　論

動物，特に伴侶動物の福祉を普及させるには，まず飼育者の飼育意識の向上が必要であろう。そのために私たち専門家ができることは，動物アドバイザーとして，飼育者あるいは購入者のニーズに応えて動物種の選択から終生にわたる飼育方法にまでおよぶ適正な動物飼育情報ならびに技術を提供することであろう。

ペットショップと飼育専門家が連携して購入者に講習会の受講を義務付けるシステム等ができれば，飼育動物にとっても大きなメリットになると考える。また，誰もが通う学校で動物にかかわる活動を充実させることができれば，動物と人とのよりよい関係が生まれ，ひいては将来の

日本の動物福祉に貢献するものと考える。

謝辞：今回の調査にご協力くださいました東京農業大学農学部の学生さんたちに心よりお礼申し上げます。また，調査書の配布と回収に快くご協力をしてくださった3つの中学校の先生方および記入してくださった生徒のみなさんに心より深謝申し上げます。

参考文献

1） 青木人志，2002，動物の比較法文化，有斐閣，pp 220.
2） 佐藤衆介，2005，アニマルウェルフェア，東京大学出版会，pp 3，90.
3） Kakigi, T., Kidachi, M., Tamura, T., Kurata, Y., Ito, H. and Yokoyama, K., (2007) Usefulness to play or communicate with dogs for the aged with dementia. 11th International Conference on Humna-Animal Interactions, Abstract book, pp 193.
4） Prothman, A., Brattig, A.C., Ettrich, C. and Prothmann, S., (2007) Preference for complex social stimuli in children with Autism. 11th International Conference on Humna-Animal Interactions, Abstract book, pp 141.
5） 土田あさみ，増田宏司，大石孝雄，2007，ヒトと動物の関係学会，第13回学術大会，予稿集，p 56.

Sense of Keeping Companion Animals at Home

By

Asami TSUCHIDA and Koji MASUDA

(Received May 22, 2008/Accepted September 2, 2008)

Summary : Research was conducted on the acceptance of euthanasia and abuse against animals among college students, and the effects and actual home conditions for keeping companion animals among middle-high school students. Most of the college students recognized that animal abuse would include violence against animals, neglect of animal care, abandonment and unsanitary management of animals. Most of the students accepted euthanasia of animals under some conditions, for example when the animals suffered from an incurable disease. In the results of the research on middle-high school students, interest in animals was shown among animal-keeping students significantly more than among non-keeping students. And the interest differed by species of animals kept. Especially, dogs and cats induced a greater sense of communication among animal-keeping students than did other animals.

Key words : *animal management, keeping animals, communication, animal abuse, euthanasia*

* Department of Human and Animal-Plant Relationships, Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture